

巻頭言

平成と油化学会と自分，そして新しい時代へ — 日本油化学会第58回年会開催について —

日本油化学会第58回年会実行委員長 後藤直宏



本年をもって平成の時代が終わるかと思うと、ついつい平成における油化学会と自分の関係を振り返ってしまふ。というのも、自分自身、日本油化学会との関係が出来たのが平成からだからである。平成4年(1992年)、私の恩師である二木鋭雄先生が大会長を務められた日本油化学会年会が東京大学駒場キャンパスで開かれた。それをきっかけに、翌年、学生会員として入会したことが日本油化学会とのご縁の始まりであった。その後、花王株式会社に入社したため、就職により油脂化学と縁が切れることはなかった。さらに転職後も東京水産大学(現東京海洋大学)で油脂化学を専門としたことから、気が付いたら26年もの間、日本油化学会にはお世話になっている。この間、日本油化学会ではたくさんの経験をさせて頂いた。今でも強烈に覚えているのは、平成15年(2004年)に米国・オハイオ州・シンシナティ市で開催されたJOCs-AOCS ジョイントシンポジウムにおける「ジャパンナイト」と称した日本油化学会主催のパーティーの企画・立案、さらには司会まで行ったことである。私自身、日本においても大きなパーティーの司会を行ったことがなかったにもかかわらず、いきなり英語での3時間にわたる司会。始まるまで心臓が口から飛び出すのではないかと思うぐらい緊張した。ジャパンナイトの司会をサポートしてくれた学生時代の友人の吉田康一氏(現産業技術総合研究所・臨海副都心センター所長)が、「もう飲んじゃえよ!」と、パーティーが始まる前に私に缶ビールを渡してくれて、私もそれを一気に飲んだ瞬間、急に緊張が解けていったことを覚えている。という訳で、あの時の司会は酔っぱらって行ったものであることを今更ながらカミングアウトする。結果、ジャパンナイトは盛会で、多くの先輩方からお褒めの言葉を頂いた。始まるまでは嫌で嫌で仕方なかった司会であったが、今となってはかけがえのない経験をさせて頂いたと日本油化学会に感謝をしている。また、震災後に行われた平成24年(2012年)のフレッシュマンサミット(年会が中止になったため、学生に対し開催した口頭発表会)では、東日本における大会を東京海洋大学において開催することを仰せつかった。予算が少ないにもかかわらず、

「懇親会も開いて欲しい」と事務局からお願いされ、「どうしたものか?」と頭を抱えたことを思い出す。また、油化学の先輩から学生へ贈る講演を実施することも依頼され、「この無茶ぶりは何なのだろうか?」と少々憤慨もした。結果、部会活動で仲良くさせて頂いている納庄康晴氏(当時株式会社カネカ、現美作大学教授)に講演をお願いしたところ快諾して頂き、自分自身も吸い込まれていくような素晴らしい講演を学生諸君へして頂いた。あの講演は今でも自分にとって忘れられない講演の1つとなっている。また、懇親会も、料理の値段を抑え、飲み物も第3のビールなどにした結果、何とか予算内に収めることが出来た。「やればできるものだ!」と自分自身を褒めたことを覚えている。

さて、このような思い出は全て平成の時代に経験したものである。平成は2019年4月30日をもって終わらしい。よって、今年の秋の日本油化学会年会は、新しい年号となってからの大会になる。そして、この日本油化学会年会の会長を私が務め、東京海洋大学・品川キャンパス(HP: <http://www.jocs.jp/nenkai58/index.html>)で9月24日(火)~26日(木)に開催することとなった。学生時代、自分の所属研究室が年会を開催したことがきっかけで入った日本油化学会で、まさか自分が年会の実行委員長を務めることになるとは夢にも思わなかった。ただ、開催するからには是非とも盛会にしたいと思っている。例年行われている一般講演(口頭およびポスター発表)、受賞講演、特別講演、教育講演などはもとより、東京海洋大学だからこその内容を現在企画中である。東京海洋大学・品川キャンパスは、新幹線が停まる品川駅からのアクセスが抜群である。また、裏門から近い天王洲アイル駅は東京モノレールの駅である。すなわち、東京海洋大学・品川キャンパスは羽田空港からのアクセスも抜群である。よって、国内外を問わず飛行機で来る場合も非常に便利である。このようにアクセスが良い会場であるが故、多くの皆様のお越しを強く希望する次第である。新しい年号のもと、新たな日本油化学会の出発を印象付ける記念すべき年会になることを強く願っている。

(東京海洋大学 教授)